

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

《人社系》

●女子美術大学美術研究科芸術文化専攻

「表現空間創出による高度人材育成と職域開発」の事例

(具体的に何を実施したのか)

芸術関連分野で活動する諸機関（アートセンター、海外文化支援財団、地方自治体、出版業界）との間で、必要不可欠であるにもかかわらず、可視化されてこなかった職域について討議を重ね、これまでにないかたちでのインターンシップを実現することができた。また、そのためのフィールドワーク自体をひとつの研究実践と捉え、印刷、展示、ディスカッション・イベントなど、多様なかたちで発表することができた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

協働する機関によって、実現可能なインターンシップの在り方が異なるために、個々に細部にわたって注意する必要があった。海外の団体と協働で行うプロジェクト（video exchange program）では、大学院生、ディレクター、教員など、担当者の立場も異なるため、共通のプラットフォームの構築に配慮した。フィールドワークの実施、およびその成果の発表については、既存の枠にとらわれることなく、目的の効果を上げるべく、大学院生を含めて協議を重ねた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

従来、芸術において補助的であるとされてきた、フィールドワーク、アーカイヴ構築、インタビュー、記録報告などの作業を、積極的にひとつの職域として捉えようとする試みを通じて、制作ではない芸術文化系の研究を進める大学院生に対して、芸術分野における主体的な役割の可能性を、多様なかたちで提供することができた。また、個々の大学院生のみならず、大学院自体が、芸術分野での主体的な役割を、従来よりも積極的に意識し、また柔軟に捉えるための契機となった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

③積極的な情報提供体制の確立

《人社系》

●女子美術大学美術研究科芸術文化専攻

「表現空間創出による高度人材育成と職域開発」の事例

(具体的に何を実施したのか)

芸術文化系の大学院の主体的活動のひとつの範としてとらえてきたアートセンターに関する調査研究の過程でえられた情報を、学内のみならず学外、海外に対しても発信することができた。出版、アーカイヴ、展示を通しての発信だけでなく、海外大学（国立ソウル総合芸術大学）での講演、継続的シンポジウム（CCD）など、多様なかたちで行い、そのためのノウハウの蓄積もあり、現在も継続中である。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

提供される研究情報については、その対象者ごとに、柔軟にその方法を設計するよう努めた。研究者向けの、ビデオ・アーカイヴ（OCA）の場合は、本体以外に、書籍化を行い、エントリー用の情報提供を行うだけでなく、国際展（越後妻有大地の芸術祭）での展示にも取り組み、不特定多数に対しての海路に着いても考察を行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

情報提供そのものの効果についての判断には、いましばらく時間が必要だが、あらゆる活動のプロセスや結果が、情報になりうるということについての意識が高くなり、ドキュメンテーションの制作自体が、アート活動の欠くことのできない要素であるという認識が定着しつつある。こうした意識は、当然それに伴い、常に、そのアウトプットの形態についても適切なものを模索するという波及効果がある。